

寄稿

マネジメント学部創部10周年を迎えて

～10年の航跡と発展への仕組みづくり～

Cerebrating 10 years anniversary of the Faculty of Management

The 10 years track and building the system for development

第2代マネジメント学部長・大学院マネジメント研究科長

The Second Dean of the Faculty of Management and the Dean of the graduate school of
Management

芝原 脩次

Yuji SHIBAHARA

1、たのしかった10年間

34年間の商社マン生活から、大学人となった実務家教員の一年生が、学部一期生の新生184名と歩み始めた、2002年4月の「あとみ桜」は忘れられない。以来10年の振り返りは、「楽しかった」の一言に尽きる。

楽しかった要因は3つある：

一つは、「人」に恵まれ、志を持った同僚との楽しさである。

二つめは、「マネジメント」の持つ研究領域の楽しさである。

三つめは、「学生諸君」と過ごす時間の楽しさである。

2、「3つの楽しさ」の背景

(1) マネジメント学部をつくり育ててきた人びと

まず、「文学部単科大学にマネジメント学部を新設しよう」という着眼点と先見性に敬意を表

したい。ビジネスマンの真髄は、文学、歴史、芸能文化、美術音楽等への造詣の深さと人格識見であることが、多くのトップ経営者のグローバルな人脈と業績からも理解できる。ビジネスは価格交渉ではなく、取引先となる人物への人間性の値踏みであると、新入社員時代から教育されてきたことを思い出す。

この文学とマネジメントとの絶妙な組み合わせを構想し構築された大学幹部と「学部設置委員会メンバー（伊藤、今野・大田・山本各先生）」の女子教育への高い志はいまでも強く心に響く。

創部2年前から、就任予定の教員と設置委員との面接が始まった。また初代学部長就任予定の山本貞雄先生との、熱い個別面談の積み重ねを通して、湧き上がって来た、ワクワク感と使命感は、決して忘れられない。創部に参加出来た者として、その後就任された専任教員の皆さんには、この「創部」の理念と夢・志は語り伝えていかねばならないと思う。10年の歳月は、「譲れないものと譲れるもの」の峻別を迫る時間でもあった。創部時のメンバーは、研究者の若手9名（敬称略：片山、柿崎、朱、中島、村松〈以上5名は他校へ〉、山澤、丹野、館田、桜川）と実務家出身8名（敬称略：山本、日下部、蓮見、秋田〈以上4名は退任〉、田中、曾田、大野、芝原）の総勢17名の教員構成であった。

強い研究心と教育を通じた自己研鑽と自己実現意欲の高い若手教員と実践、現場視点で考え言動する実務家教員との学部運営と学生教育に関する熱い論争は、いまでも懐かしい。

2011年度130か所に410名の学生を実習に派遣している、日本の大学で例のない「2年生全員必須のインターンシップ制度」の存続を論議した教授会では「9対8」の僅差で存続が可決されたこともあった。あの時否決されていたら、「跡見のマネジメントの存在感」は、いまの形で残っていたのかどうか…。考えれば、ずいぶん重要な決定事項を無邪気に論議していた、既存の大学にない、たくましい集団でもあった。互いに「さん」付けていきましょうとこのとき決めた。

しかし、会議は簡潔に、「質を高く議論のための議論はしない」という鉄則は厳守され、常に、的確な意思決定が短時間に行われてきたことは、山本学部長の真摯なマネジメント力のおかげであった。

この信頼する大きな初代学部長の後任として第2代学部長に推挙されたが、偉大な人物像と実績を引き継ぐには、荷が重すぎる事を承知した上での就任であった。激動の創成期から安定定期への繋ぎ手として、成長発展期にタスキを託す一歩者に徹し、「コンセプトの共有化とコンテンツの充実」を行動指針とした、一期2年間であった。そして、新しいメンバーを加えてマネジメント学部の次の10年を見据えた人材群への継承が進んでいることはうれしい。

(2) 「マネジメントの時代」を迎えて。

- ①「2011 年の“日本橋大伝町べったらし”（べったら漬とは、大根米麴漬けを言う）を一緒にやりませんか」と産学連携を誘われた時、学祖跡見花蹊先生が、『日本の伝統文化を守る、高い教養を持った自立的女性の育成』を目指し、137 年前に掲げた教育理念と志を思い、このプロジェクトこそ「跡見の使命」と受諾した。

300 年の「江戸伝統文化べったらし」産学連携プロジェクトへの参加は、まさに「日本伝統文化に女性視点で新しい風を吹き込む」跡見魂を具現化するプロジェクトとなった。大成功をおさめて「べったらし・べったら漬けプロモーション戦略」が一步前進した。連携パートナーの老舗新高屋（べったら漬け最大手）からは向こう 5 年間の連携を要請され、学生が企画提案した「べったら一君」は、お江戸日本橋のマスコットキャラクターに起用の計画も出てきている。

マネジメント学部の教育理念 5 本の矢である「教養教育・専門教育・理論教育・実践教育・人間教育」は学部 10 年の歴史の中で、学内外の活動を通して、着実に芽を出し開花してきていることを、創部に奔走尽力頂いた皆様に、報告させて戴きたい。これは庭の片隅に咲いた花物語であり、その後開設された「生活環境マネジメント学科」「観光マネジメント学科」の庭にも、新たな季節の花々が咲き始めていることが、跡見マネジメントの未来を示唆している。

「マネジメント」の定義は、ドラッカーブームの再燃と共に、多くの人の口に乗っている。英和辞典では「管理する。取り扱う。処理する。経営する。やりくりする等」とあるが、その対象領域は日々拡大している。この間口の広さと奥行きは、学生諸君の「ゼミ課題」「卒業論文テーマ」の豊富さと「社会貢献」への行動力に通じ、学ぶ醍醐味と面白さを実感できる大学生活となってきたと言える。

(3) 火種を持った学生たちとのキャッチボール

2009 年から 2011 年までの 3 年間で「跡見マネジメント」が、学外他流試合（他大学とのコンペ）で評価された結果は次の通りである。

- (2009 年) :
 - ①東京商工会議所主催：学生まちづくりプレゼンテーション大会（台東区）「審査員特別賞」受賞。
 - ②経済産業省主催：社会人基礎力育成グランプリ（東日本大会）「優秀賞」受賞（全国大会出場）
全国大会「特別賞」受賞。
 - ③読売新聞社主催：ベースボールビジネスアワード（BBA）「最優秀賞（大賞）」受賞。
- (2010 年度)

- ①東商：世田谷区PJ：「審査員特別賞」受賞。
- ②社会人基礎力育成GP 関東大会；「奨励賞」受賞。
- （2011年度）
- ①東商：品川区PJ：「優秀賞」受賞。（実質最優秀賞：明治大学との2校受賞）
- ②社会人基礎力育成GP 関東大会；「奨励賞」受賞。
- ③「BBA」PJ：「優秀賞」受賞。
- ④大学ゼミ対抗プレゼンテーション大会那須塩原大会「準グランプリ」受賞。

我々は、受賞を目的に活動しているのではない。各大会の審査基準にある「論理の整合性」「新規性」「具体的実現性」「表現力・プレゼンテーション力」評価への挑戦である。素直でおおらかで人柄の良い跡見生が、必死の形相で挑戦し他大学の評価に敗れて、涙を流して悔しがる姿は、実に頼もしい。火種がある集団である。「場所とチャンス」を与えれば挑戦し結果を出す力がある。「バッターボックス」に送り込めば、三振もするがヒットも打ってくる。見逃しの三振をしなければ、必ず次の機会にヒットが打てることを、1年1年学習して、自信と共に結果を出せる実力を身につけてきている。

こんな学生達との、キャッチボール（切磋琢磨）は楽しい。

3、「マネジメント」の新しい局面と発展への仕組みづくり

3.11 大震災以降、マネジメントには新しい局面が見えてきた。

一つは「サステナブルマネジメント」：持続可能な社会づくりである。

二つ目は「リスクマネジメント」の再構築である。

①「リスクテイクとリスクヘッジ」の決断と意思決定力である。

②「リスクとリターン」における「ハイ&ロー」の戦略策定力である。

三つ目は「平時のマネジメントと有事のマネジメント」のブリッジである。

いま多方面で「絆（きずな）」が叫ばれる。これが求められる場面が非日常的な有事のケースであるが、本来は日常的な平時の生活空間の中にある「信頼・信用・尊敬」の積み重ねであることは当然であろう。この当たり前への原点回帰が、「マネジメントの新局面」を考える基盤になるであろう。

マネジメントとは「世の中にある、混沌とした問題・課題、悩み・混乱等々に解決の方向性と方策を提示すること」とも言える。従って「問題解決力から問題発見力、問題設定力へと比重を移した」理論と実践の融合を体現化出来る、日常的な仕組み（学習プログラム）が求められている

と考える。

学士力（大学卒業にふさわしい品質保証）だけでは、仕事が出来ないという、企業現場からの声を分析すると、保有する能力が、仕事の場面で「発揮能力」に高めることが出来ないことを指摘している。仕事成果は、全能力を発揮した結果であることを考えると、本学部で取り組む課題と仕組みには、複数の選択肢がある。事例研究・ケースメソッド・プロジェクト活動・地域貢献活動・産学連携プログラム等は、「保有能力を発揮能力に展開し高めていく仕組み」として、成果を上げていると確信する。

10 年前に「新学部設置委員会」で議論された「MBA 方式」採用案は極めて興味深い方向性である。同時に 10 年先（2012 年）を見据えた議論を重ねて頂いていた、当時の委員会メンバーの見識と熱い志にあらためて感謝申し上げます。この「熱い情熱と高い志」こそ、あらたな 10 年への礎としたい。

諸先輩の皆様、ありがとうございました（完）。